

「節目を尊ぶ。人生は旅」

松榮山報



令和四年
秋季例大祭斎行

Shoueizanpou 2022 October

令和四年 秋季例大祭号

通巻
69

松榮山報 令和四年 秋季例大祭号
Shoueizanpou

150 Anniversary
80



①参拝者休憩所 完成予想図



何卒本事業の趣旨にご賛同の上、お力添えを賜りますようお願いを申し上げます。次第です。

令和四年十月吉日



②参道石畳・玉垣 完成予想図

御創建百五十年終戦八十年記念事業ご奉賛のお願い

当神社には明治維新の勤王の志士五柱をはじめ大分県ゆかりの四四四八柱の御祭神がお鎮まりです。

来る令和七年は明治八年の御創建から数えて百五十年の年を迎え、終戦八十年の年とも相成ります。この大きな節目の年に当たり「御創建百五十年終戦八十年記念事業」を計画いたしました。

終戦から七十有余年を数える昨今、当神社を取り巻く環境は以前とは大きく変わってまいりました。しかし、世の状況がいかに変わろうとも今日の日本の平和と繁栄の礎を築かれた御祭神の慰霊と顕彰は次の時代でも必ず果たしてまいります。その将来を見据えさまざまな世代の方々に心地よく安らいでお参りいただける境内を整えてゆく所存です。

- 一、記念事業の概要
- ①参拝者休憩所 増築
 - ②参道石畳・玉垣設置
- 二、御奉賛要項
- 【募金目標】一億円
 - 【奉賛金】
 - 個人 一口五千円から
 - 法人・団体 一口一万円から
 - 【募金期間】令和四年四月一日～令和七年三月三十一日まで
 - 【お申し込み方法】
 - 郵便局ご利用
 - ご持参
 - 銀行ご利用
 詳しくは神社までお問い合わせください。
電話〇九七・五五八・三〇九六

《永代の記念に》 十万元以上ご奉賛の方はご芳名を参道両脇の玉垣に刻銘します。

〈刻銘例〉			
大分市 護國太郎	大分市 護國さくら	大分市 株式会社護國建設 （玉垣）奉賛十万円の方	大分市 株式会社護國建設

（玉垣親柱）奉賛三十万円の方

発行／令和4年10月15日

発行者／大分県護國神社 発行責任者／八坂秀史
大分市大字牧1371 電話番号097・558・3096代

大分県護國神社

検索

http://www.oita-gokoku.jp



令和四年 秋季例大祭を終えて



大分縣護國神社宮司
八坂 秀史

十月九日、秋らしい穏やかな天候のもと秋季例大祭を執り行いました。皆様方の慰霊と感謝の祈りに四四、四五八柱の御霊たちは必ずやご感応召されたことと拝察いたします。今年も悪疫のため人数制限を設けての斎行でしたが、ご

参拝とご奉仕をなされた方々に衷心よりお礼を申し上げます。春の大祭に続き世の平らぎを一際強く祈念した日と相成りました。

先月の大分合同新聞読者の声に九十才男性からの投稿がありました。「自分たちの先輩の世代は戦争のために生まれ死んでいった。若くして戦死されたことを思うとかわいそうでならず同時に今日の平和のありがたさを実感する」と。投稿された方々の心からの追悼と感謝の念が強く伝わってまいりました。今日の例大祭はひととせに二度皆様方と心をつなぐに御霊を偲ぶ祭祀です。在りし日のそのお姿に想いをいたし、平和の尊さをかみしめ御霊安らかならんことをひたすら祈りたく存じます。

三年後の令和七年、国は終戦八十年を当神社は御創建百五十年の年を迎えます。この大きな

節目の年に記念事業を計画いたしました。護國神社を取り巻く世情が変わる中、将来にわたリさまざまな世代の方が心安くお参りいただき、御霊への祈りとご自身の願いをさらに深めるための心地よい境内に整えたく存じます。有功会員以上のご奉賛の方には正面参道左右に建立する玉垣にご芳名を刻み込み、御霊のおそば近くで永代にわたつての記念として頂きます。令和七年は昭和百年です。冒頭述べたように激動の時代に生まれ合わせた御霊に鎮魂と感謝の祈りを込めて何卒ご奉賛を賜りますようお願い申し上げます。

秋季例大祭斎了にあたり、御霊の安らかならんことと、そのご加護のもと、皆様方の日々のお幸せをお祈り申し上げご挨拶いたします。

節目を導ぶ、人生は旅



秋季例大祭を 粛々と斎行



長く感じられた今年の夏もようやく終わり、不安定な天候に心配しながらも日ごとに秋らしくなっていく十月。久しぶりに秋らしい涼やかな天気の下で、今年も滞りなく秋季例大祭が斎行されました。今にも降りだしそうな雨模様を案じながらも、その落ち着いた曇天が、厳かな祭典をさらに心落ち着かせてくださるような御霊たちからの有り難いお下がりにも思われました。

役員総代ほか各界の代表者、そしてご遺族崇敬者が見守るなか、献幣使として宮本隆之大分県神社庁副庁長をお迎えし、大前にて肅々と大祭が執り行われました。

ロシアによるウクライナ侵攻で世界平和の均衡が崩れはじめているなかで、さらにロシアのプーチン大統領は核兵器の使用も辞さない構え

であると報道されました。二度も核の犠牲になり、非核化の願いを戦後七十七年間変わることなく重ねてきた私たち日本人としてこれほど悲しく忌々しいことはありません。広島市の平和記念公園には「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませんから」と、はつきりと記している碑文があります。それは被爆者への慰霊と、人類への戒めですが、まるで良心を踏みしめるかのようなプーチン大統領の恫喝じみた言動に驚いています。先の大戦から七十七年、全人類が積み重ねてきた世界平和の礎をここに

日本は昭和二十年の終戦以来、平和への願いと不戦の誓いを込めて日々祈りを続けています。それは身近な人が戦場（いくさば）で斃れたという紛れもない各々の家の歴史があるからだとも言えます。尊い命を捧げた御霊たちや、市井に暮らしていた一般の人々の犠牲の重さ、決して元の暮らしには戻ることのできない現実を直視して、戦争の愚かさとは非情さ、無意味さを改めて世界中の人々が冷静に気づいてもらいたいと願うばかりです。

ここ数年はコロナ感染予防対策で春秋の大祭も縮小して行われておりましたが、ようやく終息の兆しも見えはじめ、このたびの秋季例大祭はできる限り多くの方々のご参列をとの願いが通じて、コロナウイルス感染禍の流行前に少なからずではありましたが戻すことができました。

大分高等学校吹奏楽部の皆さんによる祭典楽

の奉納も行われました。若人が奏でる数々の音楽に御霊たちも感応され、さぞかし和まれたことと拝察いたします。

この日を嘉するかのような穏やかな天気にと御霊たちも大いに喜ばれ、そしてご参列の皆さまの敬虔な気持ち、お杜奥深くにお鎮まりの御霊たちに届いたのではないのでしょうか。ご参列の皆さま方へ御霊たちの一視同仁のご神威。すべてを平等に慈しみ差別しない大御心がそこに感じられた祭典になりました。

一九二六年生まれのエリザベス女王。ちょうど日本が大正から昭和に変わる年のお生まれにあたります。日本を含め世界中が激動の時代へと移り変わろうとしたおよそ百年前です。

イギリスの偉大な女王として長く治世されていましたが、九月八日に九十六歳を一期に崩御されました。このように世界的に影響のある方、禍福が織りなされた世界の長い歴史を歩んでこられたような方の崩御を目の当たりにすると、時代が一区切りごとに整理されていくような、そして過去の出来事が遠くへと退いていくような寂しい思いがしました。

人生の先輩が歴史の生き証人として発してくださる戒めや慰め。そしてさまざまな人の運命を巻き込む戦争を現実体験して知った人間の尊厳と命の大切さを語る言葉ほど、心に響く教訓になるものはありません。私たちの近くにいらっしゃる壮健な先輩方を今こそ心から敬い、そして大切にせねばと改めて思いました。



「御霊たちの形見」「遺品整理作業」

豊州戦史研究会の有志の皆さんのお力添えで、今年の春よりおよそ一年を要して、当護國神社の収納庫に保管されている御霊たちの遺品のすべてをリストにまとめ、後世に残るように調査、整理を行っていただき、またご遺族や参拝者が検索閲覧できるよう祭神名簿をデジタルデータ化していただいております。これは未来永劫、これから幾代にも続いていく大切な御霊たちの声、日本人の国格の礎になると確信しています。

そこには野崎哲司さんをはじめ作業にあたられている皆さんの、「ご本人の死、ご遺族の死によって遺品に二度の死を迎えてもらいたくない」という篤いお気持ちがあります。遺品を通して戦争の風化を防ぎ、遺品ひとつひとつにもう一度血を通わせたい、多くの人に振り返っていただきたいという思いに対して感謝と尊敬の思いです。

四百点以上もの膨大な数の遺品は、手紙、遺書、刀剣、軍服などがありますが、非常に貴重な「陣中日誌」まで見つかりました。それはまさしく神宝とも言える一級の資料です。この陣中日誌は終戦時にすぐさま処分されるに値するほどの重要機密文書であり、本来であれば防衛省防衛研究所に保存されるべき歴史的に重要なものでありました。収納庫の奥深くに納められていたこのような資料が見つかったことは、ご神威に導かれた有り難いご縁であったと一同驚懼しています。

御霊が遺された歴史の証人とも言える貴重な

品々は、当大分縣護國神社はもとより、全国にある護國神社五十二社にとってはまさしく神宝です。私たちが生まれた日本にとっても崇高な精神（こころ）のかたち、そのものであると言えます。それは今を生きる私たちのもつとも身近だった人たちが尊い命を犠牲にしてこの国を守るにあたり、覚悟の思いをさまざまな手立てに託し、私たちに遺してくれた確たる息遣い、生の証拠とも言えます。それは御霊になられても尚、魂の所在をしろしめす貴重な品々であります。

生を受けた国のため、大切な故郷のため、そして愛する家族のために散っていき御霊となった数多の人々。戦況が激しくなり何も残すことなく戦禍に散り、海や山に眠っている御霊もいまだに多くおられます。どのような思いであったか察するに余りあります。おそらくは出征する人、見送る人は今生の別れを覚悟して等しく断腸の思いであつたに違いありません。

御霊にもつとも近いご縁のご遺族が高齢になっていく現在。今年が戦後七十七年を経てもなお、思い出だけを縁（よすが）のままにされているようなご遺族の哀惜のお気持ちを思うと、たとえ昭和から平成、令和へと平和な時代へと変わっても心が痛みます。自我を諦めなければならぬような時代のうねりそのものに翻弄されながら、祖国や愛する人の元に帰れるかわからない不安を抱きつつ戦地へと赴かざるをえなかった人々。国のた

めとは言え、どのような思いで出兵されて行ったか、その気持ちを思うと世代を超え平和な世の中に生きている私たちでさえつらいものがあります。

日ごとに戦況が厳しくなるなかで、家族の元に無事に届くという確実な保証がないまま戦場において「自分を残そう」とした文物は自らが精一杯生きていた証と、そして祖国にいる家族に向けた刹那の気持ちそのものであると言えます。

大切な遺品が七十七年の時を経て現在に残されている。それは奇跡とも言えることではないかと思ひます。品々のひとつひとつはご遺族をはじめ、ひいては日本国民への色褪せることのない血の通った大切なメッセージ、歴史を繋ぐ大きな役割にほかありません。

このたびの意義深い活動に心から謝意を表し、ご遺族や参拝の方々にご覧いただく機会を一日も早く設けることができるよう祈念しています。



九月二十一日

和プロジェクトTAISHI 平和と愛の揮毫

毎年、国際平和デーのこの日に全国の護國神社で一斉に行われている書家の方たちによる奉納揮毫。当神社でも拝殿にて松本重幸氏による揮毫は今年で五回目。そして今年には吉野由紀さんとのコラボレーションによる開催となりました。

おふたりによる正式参拝のあと、まず松本氏による聖徳太子の「以和為貴」の四文字を一気呵成に力強く、そして流れるような筆運びでしたためられました。息を止め丹田に力を込めて、そして書家の魂を墨と筆に託して白い紙に文字に変えていくさまは氣迫そのものと言ったものでした。吉野さんの書は「天下泰平」でした。女性らしい穏やかでたゆたうような墨跡に、吉野さんの世界平和への溢れんばかりの願いが見えるようでした。

三枚目はまず松本氏がダイナミックに「大調和」としたため、さらに吉野によって「平和は人の心で実り世界中に輝きわたる」と書かれました。まさに混沌としている今の世の中と、殺伐とした世界中の人々に必要な、大らかさと厳しさを併せ持った「大調和」という言葉ではないでしょうか。

「和を以て貴しと為す」、日本が誇る飛鳥時代の政治家聖徳太子の有名な言葉です。「大調和」と結びつけられるような、和、ハーモニー、バランスがあつてこそ、人との関係は良好に進みます。いつの時代にも心がけたい大切な指針、訓えでもあります。

また、聖徳太子は「日出る処の天子、書を、日没する処の天子に致す」という国書を当時の隋の皇帝に送っています。相手は大国ですが、大和の国は世界中で太陽が一番最初に昇る貴い国であると宣誓したような力強い言葉です。それは日本人の矜持を目覚めさせてくれるような言葉でもあります。きっと聖徳太子が「日本人よ。



何も臆することなどない。背筋をしつかりと伸ばして、正面を見据えてまっすぐと正中を歩みなさい」と諭し、後押ししてくれているようです。外憂内患の多い今の時代を生きる我々に必要な言葉と心がけではないでしょうか。

冠位十二階や十七条の憲法など国政の整備を行いつつ、隋よりも東に位置する日本であるという認識が既にあった聖徳太子の慧眼は超人とまで言われています。聖徳太子が日本の国格と日本人の品格をつくったとも言えます。

和プロジェクトTAISHIは、日本の政治のベースづくりと日本人の気高い精神の根底を創造した聖徳「太子」のTAISHIであり、世界平和を繋ぐ「大使」であり、そして私たちに「大志」を呼び覚まし、日本の「太始」に思いを馳せる活動と言えます。



(作詞不詳)

「国の鎮めのみやしろと
いつきまつらふ 神みたま
今日のまつりのにぎはひを
あまがけりてもみそなわせ
治まる御代をまもりませ」

春秋二季の例大祭や祥月命日祭の際、御本殿の御扉を開閉するとき神職の警蹕（けいひつ）の声に重ねて奏でる祭典楽です。格調高い調べで祭典の始まりを告げます。九月二十七日に執り行われた安倍元総理の黙祷時に演奏され、その荘重さが多くの国民の心に響きました。歌詞は、

国の鎮め



「野外に親しみ心を憩う」

禰 宜 後 藤 尚

コロナ感染拡大より早や三年を迎えます。今後もうまくつき合っているものなのでしょうか？

私たちはマスク着用に抵抗がなくなり、観光業や飲食業をはじめ、さまざまな業種において、いろいろな工夫して感染予防の努力もあって、感染者数が減少傾向にあることに安堵しています。どうかこのままさらに減少して終息へと向かうことを祈ってやみません。

ここ数年、心置きなく旅行をしていない方も多く、そろそろ「リフレッシュ、外への憧れ」の限界ではないでしょうか？

そこで、人ごみを避けて家族で楽しむキャンプが注目を浴びはじめて

「ボーイスカウトは、健やかな子どもを育成する世界的な運動です」

ボーイスカウトと聞くとイメージするのはキャンプやハイキング、そして街頭募金などよく言われます。ボーイスカウト活動は、野外で、子どもたちの自発性を大切に、グループでの活動を通じて、それぞれの自主性、協調性、社会性、たくましさやリーダーシップなどを育てていきます。そのプログラムはバラエティに富んでいて、各年代においてもさまざまなです。一九〇七年にイギリスで始まった青少年教育活動は、今では世界では一七二の国と地域、五七〇〇万人以上、日本には団と言われる活動母体が約二〇〇〇あり、約九万人が活動しています。

「ボーイスカウト運動の始まり」

この運動は、一九〇七年にイギリスのブラウンシー島で行われた小さなキャンプからスタートしました。かねてから少年たちの教育に大きな関心を持ち、このキャンプを主宰したイギリス人のロバート・ベードン・パウエル卿はインドや南アフリカでの体験をもとにさまざまな野外教育を通じて、少年たちが男らしさを身につけ、将来社会に役立つ人間に成長することを願い、二十人の子どもたちとともに実験キャンプを行いました。このキャンプの体験をもとに、翌年『スカウティングフォアボーイズ』という本を著し、少年たちの旺盛な冒険心や好奇心をキャンプ生活や自

然観察、グループでのゲームなどの中で発揮させ、「遊び」を通して少年たちに、自立心や協調性、リーダーシップを身につけさせようとした。これがボーイスカウト運動の始まりです。

「日本におけるボーイスカウト運動の始まり」

日本には、一九〇八（明治四十二）年にボーイスカウト運動が伝わり、全国各地に様々な少年団が数多くつくられました。一九二二（大正十一）年四月十三日に「少年団日本連盟」が創立され、ボーイスカウト国際事務局に正式加盟し、世界の仲間入りを果たしました。これが日本におけるボーイスカウト運動の始まりです。

「大分縣護國神社での大分第九団の始まり」

この運動の素晴らしさに着目し、緑豊かな境内を活動の場として大分第九団が一九七一（昭和四十六）年に、ここ護國神社の御霊の前で発団しました。以来大分第九団を巣立ったOBスカウトは五〇〇名以上に及びます。昨年二〇二二（令和四）年は発団五十年という大きな節目の年を迎えました。コロナ禍のため式典等は開催できませんでしたが、スカウトたちが楽しく安全に一年を通じていつでも訓練が行える「スカウトの森」の開拓を始めました。だんだんとキャンプ場らしく整ってきた森は、自然の地形と樹木を利用したゲームや遊びがビーバー隊からローバー隊までそれぞれの訓練ができるよう整備中です。

「ボーイスカウトの構成」

ボーイスカウトの活動は、各年齢層に応じ五つの部門により構成されています。

- ビーバースカウト…小学校一年生四月～カプスカウト…小学校三年生四月～
- ボーイスカウト…小学校六年生四月～ベンチャースカウト…中学校三年生九月～
- ローバースカウト…十八歳～二十五歳

「女子スカウトも一緒に活動」

一九九五（平成七）年以降、各部門に女子が参加できるようになりました。同じユニフォームを着用し、キャンプやゲーム、奉仕活動など、一緒に活動しています。

(以上ボーイスカウト日本連盟HPより転載)

「ボーイスカウト大分第九団へのお問い合わせ先」

大分縣護國神社社務所
電話 〇九七・五五八・三〇九六 まで



別な味わいがあります。

一方、焚き火といえは夜というイメージがあると思いますが、朝の澄んだ空気と静寂さ、差し込んでくる朝日の暖かさ。こんな風景は夜とは別物です。小鳥のさえずりを聴きながら朝の清らかな空気と穏やかな焚き火の空気が一体となり、独特な心地よさが心身を包み込んでくれます。

現代社会は多忙な日々の繰り返しです。時間に追われ毎日が無意識のうちに流されていると、大切なものを見失ってしまいます。特に混沌とした今のような世の中にあって、たまには心に余裕が持てるよう余白の時間を持つことも重要です。意識的に非日常をつくることです。そんなときキャンプは最高の相棒になってくれます。これから私も時には家族と、時にはひとりでキャンプを楽しめたらと思っています。

